

都市に残る酒蔵

(顔写真)

W22.5×H30

慶應義塾大学 システムデザイン工学科
木下 規海



50年後、都市に残る文化とはどんなものだろうか？
昔から地域と文化の中心の場となり、設備環境の最先端をゆく酒蔵は、運送、設備、卸業者、消費者、祭典など様々な業者を取り込む。地域において生産が消費と隣り合わせすることで複雑な繋がりを生み、一つの共同体が形成される。しかしながら、今や日本人の酒離れ、資本主義化を背景に酒蔵の数は減少傾向にあり、廃業となった杜氏(とうじ)は皮肉にも都市化した街へと移り住む。

ファサードで表面を資本とブランドを飾る銀座。グローバルな消費の地としての街は地域性を持たず、将来における住民の拠り所がない状態である。居酒屋、老舗、クラブが集まる地で酒を造ることで銀座とは相反する地域性と生産を構築する。
都市の杜氏と日本酒への関心を結びつけ、地域に根付いた酒文化生産サイクルとして、銀座における新し